中日新聞(長野)(2023年1月29日付)
掲載記事は中日新聞社の許諾を得て転載しています。

深い悲しみ 何年たっても

犀川スキーバス事故38年 現場で遺族ら慰霊

長野市信更町の犀川ダム湖にスキーバスが転落し、日本福祉大(愛知県美浜町)の学生ら二十五人が死亡した事故から二十八日で、三十八年となった。遺族や大学関係者ら二十六人が事故現場の慰霊碑を訪れ、祈りをささげた。(吉田拓海)

同大の丸山悟理事長は慰霊碑の前で「深い悲しみと無念の思いが胸に迫り、責任を痛感している。事故があった一月二十八日をいつまでも忘れてはならない。生涯をかけて語り継ぐ」と誓い、参列者は花を手向けて冥福を祈った。

福岡市の南郷トヨ子さん(八七)は、事故で次女の多恵子さん=当時(一九)=を亡くした。前夜に受話器越しに「気を付けてね」と声を掛けたのが最後の会話だったという。「何年たっても、ここに来ると娘の顔が浮かんで…。かわいかったんですよ」と涙ぐんだ。

事故は一九八五年一月二十八日の午前五時四十五分ごろに発生した。スキー合宿で志賀高原に向かうバスが国道19号でスリップし、ダム湖に転落。学生二十二人、教員一人、乗務員二人が死亡した。

次女の多恵子さんら犠牲者の冥福を祈る南郷トヨ子さん(手前)=長野市信更町で

「大学1年生」の娘らと参列

生還女性 当時思い友人悼む

「世代を超えて、事故を語り継ぎたい」。転落したバスに乗っていて助かった香山久子さん(五七)=埼玉県蕨市=は、当時の自身と同じ大学一年生になった長女(一八)、中学一年の次女(一三)とともに参列した。

ガードレールを突き破り、水深四㍍に沈んだバスの車内。香山さんは無我夢中で窓を開け、凍える寒さの水の中で、懸命に水面を目指した。辺りは夜明け前で曇天の暗闇。事故を目撃したトラック運転手が「こっちだ。はい上がってこい」と手を差し伸べてくれた。

バス三台で志賀高原に向かっていた。どのバスに乗るかは、集合順の振り分け。参加者の誰もが犠牲になる可能性があった。亡くなった隣席の友人らとは出発前に「スキー合宿に備えて、しっかり車内で休まないとね」と話し合ったという。

悲惨な事故が起こるたびに「せめて、これが最後になりますように」と願ってきた香山さん。「残された人たちは、こんなに悲しい思いをしていることを忘れないでほしい」と話した。(吉田拓海)

(許諾番号:20230201-28925)